
勇者以外は攻略済み

流音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者以外は攻略済み

【Nコード】

N9687Y

【作者名】

流音

【あらすじ】

女 男でファンタジー世界にTS転生。 全年齢。

そこでチキンな彼は仮面という、欲望のままに動く自分を手に入れた。

(前書き)

女 男でファンタジー世界にTS転生。全年齢。
特にBL描写はない。

「どろろしてこうなった……」

目の前の顔ぶれを見て、思わず眩いてしまった。

誰が予想できただろうか。今から旅立つパーティなのに、1人を除き、全員に手を出したことがあるなんて。

これは そう、私がこの世界に転生したことから始まった。

```
>div align="center"<>b<プログラム>/  
b<>/div<
```

ありふれた転生を提案され、私はそれを受けた。
指定した性別は男、特別に望んだのは思うままに行動できる仮面。
それではなんだから、と神様から贈られたのは【付与する力】だ
った。

今まで女として生きてきた。しかし、次は男として生きてみたか
った。

仮面を望んだのは、私がチキンだから他ならない。新しい人生を、
自分の心のままに楽しみたかった。

どうしても頭の中でうだうだ考えてしまうので、仮面を付ける間
くらいは行動的になりたかった。

ファンタジー世界に生まれて十九年。楽しませてもらってしまし
た。

とある田舎に生まれ育ち、髪は少しくせ毛で茶色、目も茶色。個
々の地方によくある色だ。

背丈も少し高めで、体付きはしっかりしている。美形度は残念な
がら……少しかっこいい程度ではなからうか。

まあ、それは置いといて。

まずはエンチャンターとしての能力を活かすべく村内の鍛冶師に
弟子入りした。

エンチャンターとは付与系魔法を用い、武器や防具等の能力を上
げたり特殊な効果を持たせることが出来る。即ち、魔術師の一種で
ある。

魔術師に弟子入りするのが普通なんじゃねえの？

俺もそう思った。でも、こんな田舎に魔術師なんかいないんだよ。むしろ鍛冶師がいることも奇跡。

ただ、武器や防具に能力を与えることが多いなら、自分で作れたり治せた方が今後良いんじゃないか？そう考えた結果である。

幸いなことに、生まれた隣に工房があった。

師匠は父親の親友で、俺にエンチャントの才能があると分かると思って喜んで弟子にしてくれた。

ただ、”鍛冶師は剣士でなければならぬ”というモットーに基づいて、剣術の修行もさせられたが。

途中、何度も脱走して捕まったことは良い思い出です。

さて。皆さんも気になっている仮面のことですが。

あれは素晴らしいアイテムです。

十歳の誕生日に使用できることになったのだが、実に素晴らしい。俺の体の一部で、使用したい時に念じれば顔に装着されるといいう仕組みだ。

目と鼻の周りを隠すように現れる。

装着すると、髪の色が茶から黒になり、服装が剣士のようなデザインになる。

着替えなくても、一瞬で服が変わるのがすごく便利だ。

それを付けた時の俺は、心の動くままに行動することが出来る。思ったことは口にすると、やりたいこともやってしまう。

お気付きかと思いますが、今の性別が男だろうと俺の恋愛対象は男。

ある日いつもの様に、工房の休憩時間に裏でボーっとしていた。鍛冶作業ではどうしても目が疲れるから、時間がある時は緑を眺めることにしている。

「あ！ レン兄ちゃんいたー！！」

「おー。なんだ、カイト」

何かを振り回しながら駆け寄ってくるカイト。カイトは四歳下で、嬉恥ずかしの十五歳。可愛い弟的存在だ。

カッセル村に住むカイトは、俺と似通った色をしていた。髪も眼も茶色だ。ただ、俺より少し明るい。

髪型もやんちゃ坊主、といった感じで自然にツンツンと逆立っている。

カイトは釣り上った目を細めながら、

「ほら、これ！」

「これって、主語も何もない……って、オイ！」

「ん？」

「ん？ じゃないよ。お前、これ何か分かってる？」

「分かってるよー。流石にそこまで馬鹿にゃねーによ」

膨らんだ頬を両手で押し潰し、横に引っ張る。

カイトが見せてきたのは、この村の最奥に刺さっていた剣だった。ありがちな伝説のほにゃららで、それをこいつが持っていること

が問題だ。

「お前、これが何だか言ってみろ」
「しえいけん」

大きなため息をつき、手を離す。
そう、これはどこからどう見ても聖なる剣、クラウ・ソラスである。

自慢そうに見せてくる幼馴染に不安を覚えることしか出来ない。

カイトは意味を分かっているのだろうか。

「カイト」
「なに？」

ニッコリ！
そんな擬音が付きそうな笑み。分かってねえな、これは。

「勇者になるのか？」
「うん」

きっぱりとした返答に、覚悟を感じた。

「だからレン兄ちゃんもついてきてな！」

「レン兄ちゃん！」

明るい呼び声に笑顔を返すが、それにつられて振り返る三人に笑みが凍った。

動かない俺に焦れたのか、カイトが走り寄ってくる。当然、三人も。

甲冑を着た騎士、黒のローブを纏う魔術師、白いケープを羽織った神官。

ばれたらこころされる。

仮面の俺^{カレン}レンだとばれてはいけない。

仮面のレンだからカレン、なんて恥ずかしい名前にしなきゃよかった。

「初めまして。カイトとは幼馴染の、レンです。

エンチャントで鍛冶師見習いですが、まだまだ勉強中です。

足手まといにならないよう頑張りますんで、よろしくお願いします」

未だ感じたことのない緊張に、言葉が硬くなる。

その様子に騎士のアルベルが

「そんなに硬くなることはない。

カイトからは付与魔術師として優秀だと聞いている。

僕の名前はアルベル＝リ＝ハイウィンド。これからよろしく頼む」

肩までの金髪と凧いだ湖のような瞳。

カレンの時には滅多に見せてもらえない、穏やかな笑顔だった。
えええええ。

アルベルの隣にいた魔術師リーツェは、騎士に促されて無感情に頷いただけ。

サラサラな髪を撫でたいよ。リーツェたん、他人にはそんな感じなんだ……。

前世の俺と同じ色合いは一番のお気に入りなのに、そんな態度は辛いです。

「アルベルさんの仰る通りです。

私も回復や防御にしか特化していませんが、こうしてパーティに選ばれたのです。

これからよろしくお願いしますね」

少しウェーブな緑髪を背中ですつにまとめ、柔らかくほほ笑む神官さん。

「ファス殿、肝心な名前を忘れてる」

アルベルに指摘され、慌てたように、

「あ、そうですね、すみません。
私はファス「フェン」ハイリヤと申します。
改めて、よろしくお願いします」

焦った表情に、とても癒される俺は変態ですか。
ほんわかする。それが表情にも表れていたのか、ファスもへらっ
と笑ってくれた。

「アルベルさん、リーツェさん、ファスさん。
よろしくお願いします。
カイトも、頑張ろうな」

横で拗ねたように俺のマントの裾を掴むカイト。その頭を撫でな
がら心の中で祈った。

どうかばれませんように、と。

(後書き)

キャラごとに出会いか、ストーリー的なものがあります。
書けたら投稿したいな、と思ってます。

そんなにBLにはならない予定。予定は未定だけど。

なって、15くらい……もわかりません。

読んで下さり、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9687y/>

勇者以外は攻略済み

2011年11月29日02時55分発行